

空中回廊

第2号

A I C H I
P R E F E C T U R A L
M U S E U M
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

美術館と文化・教育
宮崎保光

所蔵作品紹介
小出裕重

1
2
3
4

鑑賞会から
レオナルド・ダ・ヴィンチ
人体解剖図

事務局から

AICHI ARTS CENTER



美術館と文化・教育

愛知県美術館友の会副会長
豊橋技術科学大学教授

宮崎 保光

愛知芸術文化センターの前身である旧愛知県美術館の開館は、昭和30年2月であり、私がまだ中学生の時であった。私が通っていた中学、高校がその近くにあったため、開館間もない美術館には通学途中によく訪れ、楽しんだように記憶している。その後、大学生による愛知県の学生美術サークルが発足し、文学部の学生も多く、私が大学生のときの昭和34年には美術サークル誌「Vie」が出版され、美学論も掲載されていた。彩画堂とか、文天堂の3階の桜画廊においても展覧会活動が行われており、アクション・ペイティングやアンフォルメルが流行していた頃で、その作風を試行していたのを憶えている。美術館友の会は、私の絵画日記によれば、当時参加していた愛知県学生美術サークルのシニアメンバーたちの努力もあって、昭和37年11月発足したと記されている。

私が小学生であった昭和27年6月、兄につれられて、栄町の丸善で、久保貞次郎氏の「児童美術」を買ってもらい、二科の北川民次氏の絵や子供の絵を毎日よくながめていた。ちょうどその頃、久野真先生に学校とは関係ない美術小グループの一員として美術指導を受けていた。力強いタッチの線を引く先生だと子供心に思っていた。しばらく久野先生ともお会いする機会がなかったが、大学入学後お会いした折に、抽象絵画の本質は何であるのか、何も無いのかもしれないと申し上げた。その答えは「君、無を書くなんてすばらしいじゃないか」というものだった。

当時、先生が既に当地での現代美術の中心的メンバーとして活躍されていることを知り、昭和39年11月、先生をお呼びして美術サークルの面々と現代美術の問題点を中心に討論会を開くということになり、仲間達と美術をめぐる議論を深める機会を得た。昭和37年1月には松坂屋の中7階で名大展が開かれ、私も出展したが、このとき、徹夜してガリバン刷りのプログラムを作ったことを記憶している。このときの展覧会会場費はただとなり、このときを最後に松坂屋のその画廊は消えてしまったが、最近立派な美術館として松坂屋南館に開館したのは皆さんご存じのことだろう。その当時、愛知県の美術館では昭和39年9月にマイヨール、昭和40年1月にはモローの展覧会が開かれ、深い感銘

を受けたことを憶えている。

旧美術館は、大学とは異なる場として私の青春時代に様々なことを教えてくれた。新しい本格的な美術館もこれまで以上に若い人々にとって素晴らしいものになってほしいと思っている。幸い、新美術館では、「クレー展」はじめ素晴らしい企画により人々の期待を少しずつ満たしているようである。

22年前、西ドイツに、ドイツの学術財団、フンボルト財団の支援により、2年間、家族ともども生活したときに、日本と同じ敗戦国でありながら、伝統的な文化と産業技術を堅実に再建している姿を見て、日本の底の浅さを感じずにはいられなかった。日本では、バブル経済が表面的に展開し、今日、経済的に苦境にあることは、むしろ、当然のことと感ずる。

この2・3年の間に名古屋に二つの立派なミュージアムが開館した。一つは、栄の愛知芸術文化センター、愛知県美術館であり、もう一つは、西区の産業技術記念館である。古くから、地理的にも西の京都と東の鎌倉、江戸（東京）の間にあり、鎌倉街道の中間に位置する愛知、名古屋は、もともと情報の入り易い環境にあった。文化的香り高い歴史もあり、また、近代化の時代のはじめには、産業技術の展開は、織物にしる、自動車にしる、日本の他の地区に比べても斬新なものがあったように思う。最近ではもの作りの愛知といわれるようになっており、その意味でも、本格的な芸術文化施設である愛知芸術文化センターが自治体により建設され、また、現代技術を集結させた産業を中心に据えた本格的な博物館が出来たことは、大変うれしいことである。こうした時代に高いレベルのミュージアムを持つたことは、せめてもの幸いであろう。「アート」のことには、もともと、芸術ともの作りの技術の両面があるといわれているが、当地にそうした新しいミュージアムが出来たことは、将来の発展にとって意義深いことと思う。しかしながら、こうした施設がこれからますます維持発展するためには、広い視点を持った人々の知恵と努力が必要であろう。

米国の大学の多くには、キャンパス内に美術館があり、文化施設が専門教育研究施設とともに併設されて

いる。マサチューセッツ工科大学には、科学技術の研究施設ばかりでなく、優れたパブリックアートの作品群がキャンパス内の芝生の上に設置されている。科学技術と芸術を享受する心を自然の中で養うような環境が整えられている。文化、芸術は、立派な専門家を育てる上に重要であるというポリシーが大学の運営の中核になっているのだろう。

「新しい分野、それは社会科学と人文科学と自然科学の境界の分野である。また、それは、芸術とも接している。社会の進歩は新しい分野を生み、新しい芸術を生む。しかし、新しいからといって満足してはいけない。新しいものは常に新しくされなければならない。生体のように、有機的なつながりを持ちながら常に進歩し、変貌する社会の中で本当に人間らしく生きるためにも、先人の経験を聞き、後に生きるであろう若人の勇気とともに我々の世界のための正しい歴史観のある闘いを続けなければならないと自分にいいかさせた。」この文章は昭和40年5月名大美術部の雑誌「木偶」の創刊号に書いた拙文である。当時私は大学院生であった。もう30年も前のことである。同じ年の1月には、雑誌「Vie」に現代社会における科学と芸術について論じた小文を提出したりした。この年は私の恩師宇田川銈久教授が急逝された年でもあり、国際会議で2回目の論文発表した年でもある。

研究者を目指し、科学技術を専攻しながら、美術サークルに身をおいて、文学部など他の学部友人と交流できたことは楽しい思い出であり、また、自分の成長にも大きな役割を果たしてくれた。子供の頃の絵の友人たちには、いまでも親しい人が多い。芸術と文化は、人生にゆとりと勇気を与えてくれるものである。

デンバーの美術館で、小学生たちが床に坐り込んで、先生の話聞きながら、多くの抽象絵画を楽しそうに観ていた。彼らの近くを通り過ぎながら、私の子供の頃のお絵描きの戸外の時間や、学生時代のサークルのことを思い出した。子供にも、成人にも、芸術に触れる時間は、人々にどれほど心の豊かさを与えてくれるか知れない。美術館が永く人々のためにそうした文化の居間となり、素晴らしい教育の場になってほしいと願うのは私ばかりではないだろう。

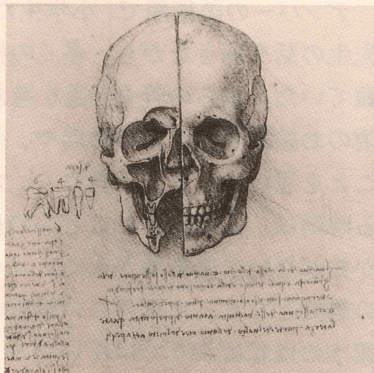
鑑賞会から

レオナルド・ダ・ヴィンチ 人体解剖図

レオナルド・ダ・ヴィンチ「人体解剖図」展の鑑賞会は、友の会理事の馬場駿吉氏(名古屋市立大学教授)に医学を専門とする立場からご参加いただき、美術館の長谷川三郎副館長との対談のかたちで行われました。この鑑賞会に出席された皆様は、レオナルドの人体解剖図をたいへん興味深くご覧いただけたようです。ここではレオナルドの解剖図の特質をより多くの方にご理解いただけるよう、その要旨をご紹介します。

長谷川：

まずレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)が活躍する以前、15世紀のフィレンツェの美術状況について簡単に話します。レオナルドが活躍したのは1500年前後ですが、それよりかなり以前、1400年頃にチェンニーノ・チェンニーニが著した『芸術の書』あるいは『絵画術の書』と呼ばれる書物に次のような記述があります。「お前が手にしうる最も完璧な道案内、最良の舵は、栄光の門に他ならぬ自然物の写生であることを弁え給え。この自然物は、他のいかなる手本にもまさるものであるから、これに大胆に信頼を寄せて写生を続けるのである。」この書物は、絵画の技法などについて詳しく記したのですが、その内容はどちらかと言えば中世的な性格をもったものです。しかし、そこで絵画を描くために自然物を写生することを強調しているのは意味深いことです。



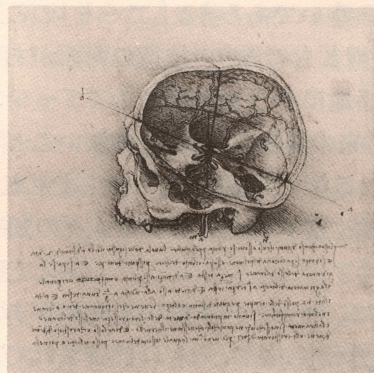
《切断された頭骨》

この頃から、フィレンツェでは、自然を写すということが重要視されるようになっていったのです。

フィレンツェには有名な大聖堂がありますが、この聖堂の大円蓋がブルネレスキの設計で完成されたのが1435年のことです。ブルネレスキは最初、彫刻家であり、建築家・技術者として活躍したわけですが、それは万能の人レオナルドの姿を思い起こさせます。そして彼は、絵画に現実の風景の広がりや奥行きを再現する方法である遠近法の原理について研究を行ったことでも知られています。

このフィレンツェの大聖堂の向かい側にある洗礼堂の扉には、後にミケランジェロが「天国の門」と呼んで賞賛したレリーフが残されています。その作者であるギベルティも、「力の限り自然を模倣する」ことが大切であるということを1450年頃に言っています。また『建築論』や『絵画論』を著し、建築家として活躍したアルベルティ、彼も典型的なルネサンスの万能の人だったのですが、彼はその絵画論のなかで、「肢体を描くときは、まず最初に骨を描きなさい。骨はほとんどまっすぐで、常に定位置にあるからだ。次にその上に腱や筋を加え、最後に肉と皮でこれらを被うことだ。」という記述を残しています。このように、15世紀のフィレンツェでは「自然を写す」ということが美術の上でずっと強調されてきたのです。

レオナルドの解剖に関連することを紹介すると、レオナルドの先生であるヴェルロッキオと同世代の画家であるアントニオ・ポライオーロは「その下にある解剖学的構造を観察するために多くの死体の皮を剥いだ」と、後にジョルジョ・ヴァザーリが『美術家列伝』のなかに記しています。また、ピエロ・デルラ・フランテ



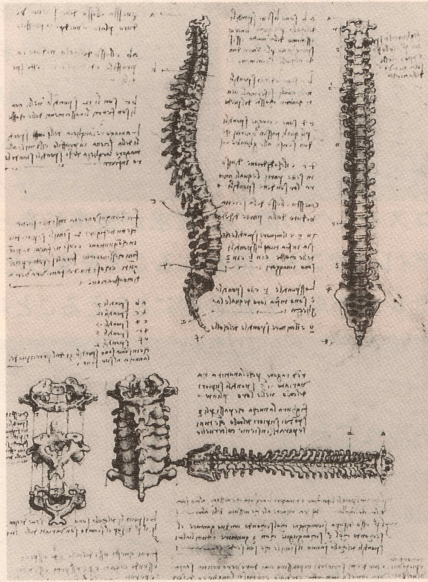
《頭骨：内部》

スカはレオナルド以前に最も進んだ絵画の遠近法の著作を残したことで知られていますが、彼は眼の解剖学的知識をもっていたようです。



《脊柱》

このようにレオナルドが登場する以前から、フィレンツェでは、自然を写すことが重要と考えられ、さまざまな研究が重ねられていきました。何より大切なことは、遠近法による空間表現によって大自然の風景や大気

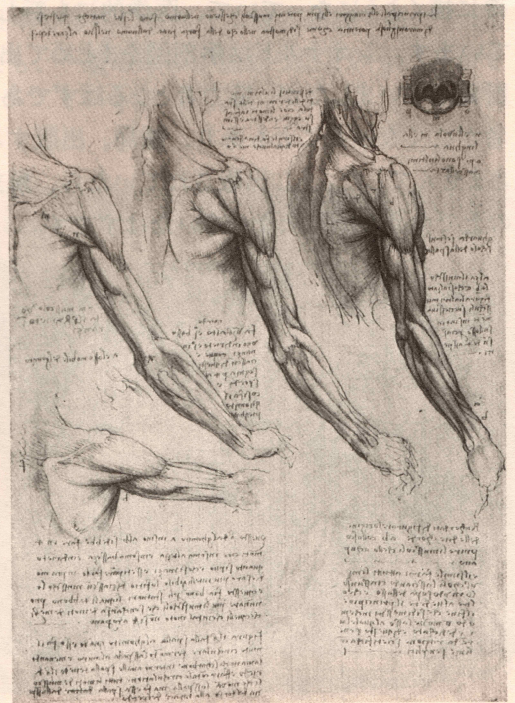


を描くことも、人間を立体的に表現することも、それは別のことではなく、彼らにとって大自然を模倣するという、一つの目的のなかで試みられたことであったわけです。そしてレオナルドもそのような環境のなかで活動をしてきたことを、まず理解しておかねばなりません。

レオナルドについて少し触れておきます。彼は30歳頃に、遠近法の研究成果を《マジの礼拝》という作品に残しています。また、同じ頃に制作された《聖ヒエロニムス》では、その人物表現に解剖学的な関心があったことを確認することができます。そして有名な《最後の晩餐》の、例えばユダを描くために残した顔のデッサンでは、解剖学的な成果を見ることができます。この解剖学的な成果は、あの《モナ・リザ》にもいかされているわけです。このように彼の作品からもわかることですが、彼の解剖学への関心は、それが独立したものではなく、自然に対するあらゆる研究のひとつとして解剖ということを位置づけることができるということです。彼は「画家は自然の鏡たるべし」と言っています。また「絵画は模倣した対象と最もよく一致するとき、最も賞賛に値する」とも言っています。この絵画の目的のために彼は解剖を行ったということが出来ます。そして彼は、大宇宙と人間とはマクロコスモスとミクロコスモスの関係にあると考えていました。彼にとって解剖によって人体を探求することは、宇宙を探求することでもあったわけです。

馬場：

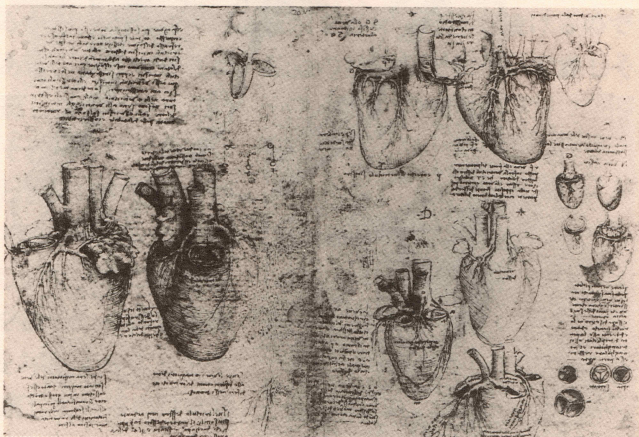
レオナルド・ダ・ヴィンチにいたる解剖学の歴史を簡単に紹介して、彼の解剖学について考えてみます。解剖学はおそらく古代ギリシャに始まったと思われます。臨床医学の祖といわれるアリストテレスは、当時の医学的な知識を総合的にまとめたといわれています。このアリストテレスの時代(紀元前4世紀頃)に解剖が行われたという事実は記録されていませんが、おそらく戦争でひどく傷つき犠牲となった人を見たりすることで、人間の内臓などについての知識を蓄積していったと思われます。ですから当時の人には、人体の構造はかなり知られていたと推測できます。解剖学についての記録が残されているのは、紀元前3世紀に当時の文化の中心となっていたアレキサンドリアで、フェロフィウスが最初に人体の解剖をしたと伝えられていることです。そして、紀元前2世紀頃の古代ローマで、ガレノスという人が、人体の構造と生理的な機能を科学的に結び付けたと言われています。このように発展してきたヨーロッパでの解剖学は、古代ローマの衰亡によって、その後約千年ほど途絶えてしまいました。その間は、アラブやインドで解剖学の命脈を保っていたという状況でした。



《腕、肩、首の筋肉》

11世紀から12世紀になると、ヨーロッパで解剖学が再び盛んになってきました。それはルネサンスに先立つ、自然科学の復興の動きとすることができます。解剖学は、当時いくつかの大学が設立された北イタリア（ボローニャ、パヴィアなど）で盛んになっていきました。そして13世紀から14世紀にかけて解剖学者として活躍したボローニャ大学のモンディーノは古代ギリシャ以来の解剖学の知識を総合的にまとめて出版しました。当時、既にグーテンベルクによって印刷術が発明されており、このモンディーノの著作はその後しばらく解剖学のバイブルといえる存在となりました。この著作は、古い知識をまとめたもので、あまり新しい発見はなかったのですが、レオナルドもこの本に記載されていた当時の解剖学的知識を参考にしており、これに大きな影響を受けています。彼は実際の解剖にあたって、事前に予備知識としての勉強をしていたわけですが、そのために誤解してしまったということがあります。

レオナルドは30歳頃にミラノに移りましたが、ここで35歳頃に初めてミラノの病院で死体の解剖を行いました。その後は、ミラノやパヴィアなどの解剖学の教授と親しくなり、60歳頃までに約30体の解剖を行いました。彼は、1500年代になると解剖にも熟達し、解剖図も正確に描くようになっていて、医学的にも新しい発見をしています。レオナルドは解剖図をまとめて出版しようと計画していましたが、協力者となるはずであった解剖学者が亡くなったこともあり、結局、出版することはできませんでした。もし出版されていたら、解剖学の歴史の上で大きな業績となっていたはずですが。



〈心臓〉

レオナルドはたいへんな好奇心の持ち主で、いろいろな仕事に手を付けましたが、すべて未完に終わってしまいました。それはディレクタントの弱点として片づけてしまうこともできるかもしれません。しかし、彼の仕事を総合的に見てみると、そこには人間というミクロコスモスへの関心と探求が根本にあったと言えます。ディレクタントと言われることをものともせず仕事をしたレオナルドを総合的にとらえることは、今の時代にも意義あることではないでしょうか。

出品作品から

《切断された頭骸》

馬場：ここで大切なのはレオナルドが、頬のところにある上顎洞、鼻と眼の上部にある前頭洞を正確に描いていることです。上顎洞は、1651年にイギリスの解剖学者ハイモアが発見し、欧米ではその呼称にハイモアの名が付けられていますが、実はその160年も以前にレオナルドが発見し、正確に記録していたのです。

《頭骸：内部》

馬場：ここでは頭蓋底を描いています。彼はこの部分が人間にとって重要と考えていました。脳神経が交差したり、下方へ出ていく部分にあたりますが、それに注目して観察しています。

長谷川：この作品は頭蓋の垂直切断面と水平切断面を描いているわけですが、透視図法としてはまだ不正確な段階にあると言えます。

《脊柱》

馬場：レオナルドは脊髄の状態を詳しく観察し、特に脊柱が湾曲している状態なども正確に描いています。

長谷川：ここでレオナルドが、脊椎骨をばらして描き、線で結んで図示することで、実際にどのように組み合わされているかがわかるように描いていますが、これは彼のまったくの独創的な方法で、現在では珍しい描き方も彼が工夫して作りだしたものです。

《腕、肩、首の筋肉》

馬場：レオナルドは絵画の制作にも役立てるため、筋肉の観察と描写を盛んに行っています。これらの筋肉の状態はとてもよく観察されています。

長谷川：レオナルドは左利きですから、画面右側から順に描いていったと考えられます。そして順次、人体を観察する角度を変えていき、連続写真のように描いています。また、腕が少しづつ上げられていくことにもなる筋肉の変化も併せて観察しています。この時期の解剖図は、明暗による立体表現も正確で、見たままに描くということを実現しています。

《心臓》

馬場：心臓の観察では、冠状動脈や弁の構造などを正確に描いています。しかし、心臓内部の下部構造は左右の心室という部屋に別れていますが、その壁に穴があいた状態で描いています。これはガレノスからモンディーノへと継承された解剖学の知識の影響を受けて、それを前提として解剖に臨んでいたために起きたことと考えられます。彼は主要な血管の状況などもかなり正確に観察していたのですが、心臓がポンプの役割をしていて循環の中心であるということには気がつかなかったようです。これなどは彼が当時の解剖学を勉強しすぎたために、かえって間違った観察をしてしまった例ということができます。

(この要旨は村田真宏が作成しました)



所蔵作品介绍

こいでならしげ
小出 檣重

愛知県美術館主任学芸員
村田真宏



《N婦人像》1918年 油彩、麻布 90.8×78.0cm

小出檣重(1887-1931)は、大阪市内の製菓業の家に生まれ、はじめ日本画を学び、後に東京美術学校(現：東京芸術大学)の洋画科を卒業しました。彼は1919(大正8)年の第6回二科展に《Nの家族》を出品して樗牛賞を受賞、翌年には《少女於梅の像》で二科賞を受賞して一躍脚光をあびました。彼のこの頃の作風は、重厚な写実的表現と、セザンヌをおもわせるような確かな量感の把握を特徴としています。

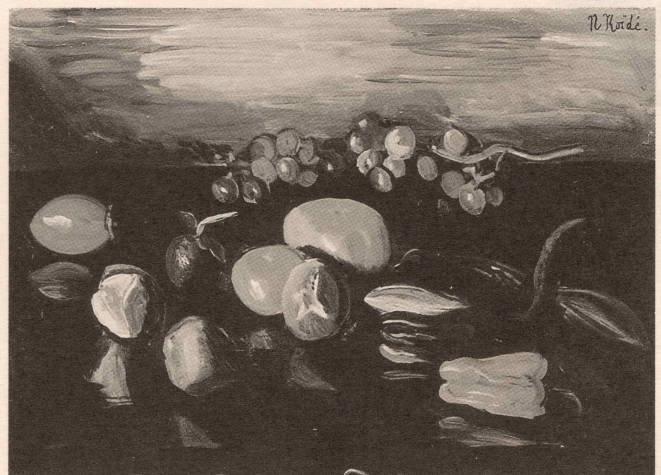
美術館では、《N婦人像》をコレクションの重要な作品として、以前から所蔵作品展で公開してきました。この作品は、彼が初めて二科展に出品した前年、1918年に自身の妻を描いたものです。色調はこの時期特有の

暗さをたたえています。赤いカーテンやテーブルに置かれた花、襟巻をしてゆったりと腰掛ける姿には、当時、身重であった妻の母性を祝福しようとする画家の精一杯の愛情が込められているようです。

小出檣重は1921(大正10)年から翌年にかけて、フランスに約半年程滞在しました。この時期に彼の作風は大きく変化し、帰国後は明暗の対比や形態の単純化などに際だった特徴を示すようになりました。そして、静物画や裸婦像に濃厚な質感をもった優れた作品を残しました。彼は、日本人の体質を失うことなく、いかにして本格的な油絵を描くかというテーマに対して、具体的な作品によって一つの結論をだしたとすることができます。つまり、日本人の油絵を完成させたわけです。

この度、美術館では彼が確立した作風を良く伝える優作《蔬菜静物》を新しく収蔵しました。この作品では、季節の果物や野菜が黒いテーブルに一見雑然と置かれたように描かれています。その滑らかで粘りのある筆致や冴えた色彩は、個々の果物や野菜の存在を強く感じさせるとともに、画面に色と形による絶妙な響きを創り出しています。

この作品がコレクションに加わったことで、小出檣重の作品展示が飛躍的に充実することはもちろんですが、近代日本の洋画の特質を所蔵作品展で紹介するという意味でも、一層の厚みが加わったといえます。



《蔬菜静物》1925年 油彩、麻布 40.0×55.0cm

会報の名称について

創刊号でこの会報に名称を付けていただくことを会員の皆様にお願いましたが、十数人の方からご提案をいただきました。友の会の役員の方々と事務局とで検討し、杉山博之さんからご提案のあった「空中回廊」に決定いたしました。杉山さんはじめ、ご提案くださいました皆様に心からお礼申し上げます。

空中回廊

地上にある回廊は、入口も出口もない自由な空間を提供する。その屋根は気まぐれな天候から私たちを守ってくれる。そして寺院の回廊にみられるように、内の聖なる空間をまわりから眺める装置としての働きをもつとともに、私たちが聖なるものと交流する場ともなる。

20世紀末に出現した美術館の回廊は、空中に浮かぶことで左右に開かれているばかりか、上下にも開かれて、より自由な出会いと体験の場となるであろう。

編集：愛知県美術館友の会事務局／村田真宏

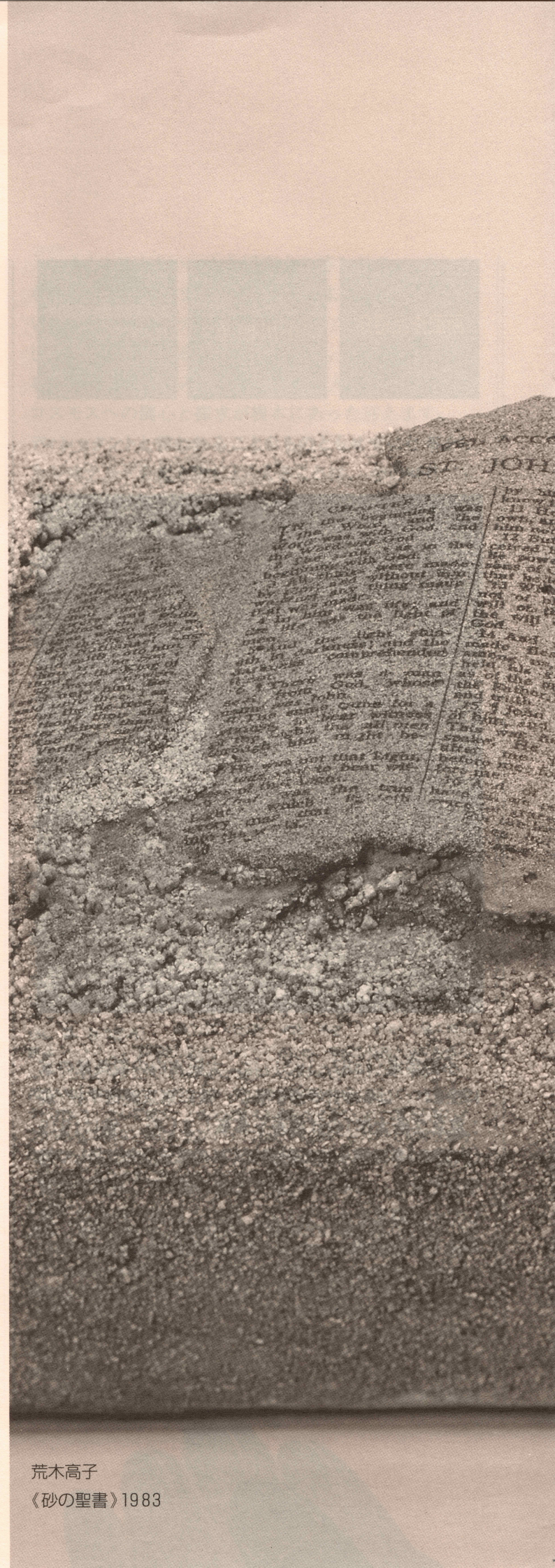
発行：1995年11月

愛知県美術館友の会

〒461 名古屋市東区東桜1-13-2

TEL.052-971-5511

デザイン・レイアウト：小谷恭二



荒木高子

《砂の聖書》1983